

『愛を読むひと』 原題 The Reader 2008



復活祭の休みに自転車旅行にでかけたマイケルとハンナ

**映画批評**

『愛を読むひと』 原題: THE READER 2008

～ 読む・読めない・読まない、を暗喩として警鐘する

塚田三千代 (翻訳家・映画アナリスト)

マイケルは高校生の頃、ひと夏の‘初恋’を体験するが、ハンナの突然の失踪による喪失感も味わう。映画はこれを序奏にして、ナチス政権下で起きた教会焼殺事件の告発を法廷で受けているハンナをクローズアップする。この裁判をきっかけに、国家の法の正当性を研究するマイケルの人生が浮き彫りになる。『愛を読むひと』の原題は THE READER — 映画は‘本を読む／読めない’ということの意味深さを警鐘している。

監督は映画技法として、フラッシュバックや会話と映像のオーバーラップを多用して、暗い事件を柔らかに包みこみ、伝えたい真意をやや不透明にしている。法廷でのハンナの応答とこ

それを傍聴した学生たちと指導教授のゼミナール、そして、ハンナに聞かせる朗読を録音するマイケルの姿とそのテープを聞きながら字の読み書きを習得するハンナをオーバーラップするシーケンス、ここが本映画のクライマックスである。文学では行間を読んで意味を深めるが、映画では、俳優の表情や映像を読みとって意味を深めることが求められる。さすがに主演女優ケイト・ウィンスレットはオスカー像受賞にふさわしい力量で、ハンナ役をみごとに演じてこれに込めている。

本映画は一回の鑑賞だけでは読み深めることの難しい映画作品になっているが。これは鑑賞者に2度も3度も観て、「世代にとらわれずに観る側で個々に理解して欲しい」と、監督が願っているからであろう。原作がドイツ語であるにも関わらず、英語で話させているのも、世界共通語である英語を使って、世界中の人たちにこの映画を観てもらいたい、という期待であろう。

**—What’s an odyssey?**

**—It’s a journey. He sets out on a journey.**

**—They operate by something called law. You’re not guilty of anything merely by working at Auschwitz.**

**—Well, what would you have done?**

**Should I never have signed up at Siemens?**

この映画では、上記のセリフが出現するシーケンスに注目したい。  
詳細は「映画から選んだ、じっくりと味わいたいセリフ」に載せてある。

## 映画のストーリー

本映画は、第 2 次世界大戦の終末期から戦後の復興期へと移りゆくドイツの社会背景を知れば、物語の深層がいつそう理解しやすくなるのだが、それは別にして、



物語は、1995 年、52 歳のマイケルの回想で始まる。1958 年のベルリン。当時、ギムナジウム 6 学年のマイケルは下校途中で体調が悪くなり、ある女性に助けられる。女性は市電の切符切りをしているハンナである。彼女は 1943 年に 21 歳でナチス政権下の親衛隊に入隊し、強制収容所の看守を務めた後、戦後にベルリンへ来ていたのだが、マイケルは裁判の証言シーンを見学するまではこの事を知る由がない。

2 人が出会った当時、ハンナは 38 歳、マイケルは 15 か 16 歳であった。具合が悪くなった自分を介抱してくれた年上の女性の美しさにひかれて‘生ある恋’に落ちてしまう。彼にとっては、母と息子ほどの年齢差は存外で、実母ならとても恥ずかしくて一緒に並んで歩くことなど出来ないが、ハンナとなら平気であった。そんなハンナのために本を朗読して‘生ある恋’に満ちた時間を過ごすことが最高の喜びであった。

しかし、突然の別離。





1966年、マイケルが再会したのは、Heidelberg Law School に在籍中に法律学ゼミで強制収容所裁判の法廷を見学したときである。この裁判でハンナは無期懲役の判決を宣告された。43歳のハンナは他の看守の罪までも一人で背負うことになる。傍聴席で一部始終を聞いていたマイケルは、この時彼女の隠した真実に気付いたのだが、それを言い出すことができない。1963年12月から1965年8月にかけて、西ドイツでは「アウシュヴィッツ裁判」が頻繁に行われ、討論やデモ行進も賛否両論の立場でなされ、それがマスコミの関心を集めていた。

やがて時間が経て、弁護士となったマイケルは1974年、妻と離婚し、幼い娘の養育をノイシュタットに住む母に託した。その後、独りで暮らすマイケル。本の朗読をテープに録音して、服役中のハンナへ送ることを思いつく。これはハンナの服役8年後のことだったが、それ以後、朗読テープを10年間送り続けることになる。最初に送ったテープはホメーロスの「オデュッセイア」である。

録音テープを受け取ったハンナはすぐに送り主がマイケルだと気付く。そして、本気で字を覚え、独力で読み書きができるようになる。51歳で始める手習い事は大変な努力だが、彼女はそれを成し遂げ、初めて、マイケルに手紙を書いた。力強い筆跡である。

1988年の恩赦で出所することになったハンナにマイケルは会いに行く。そしてハンナに  
”Have you spent a lot of time thinking about the past?” と尋ねると、ハンナは” Before the trial I never thought about the past. I never had to.” と応えた。かさねて、”What do you feel now?” と聞くと、” It doesn’t matter what I feel. It doesn’t matter what I think. The dead are still dead.” と答えた。そして ” **I have learned, kid. I’ve learned to read.**” と付け加えた。

映画のラストシーンは、丘の上の教会の裏の雑木林の木立の下にある HANNA SCHMITZ 1923-1988 と彫られた墓石の前で交わす父と娘ジュリアとの会話、それに続くナレーションで終わる。

JULIA: Who was she?

MICHAEL: That's what I wanted to tell you. That's why we're here.

ULIA: So tell me.

I was fifteen. I was coming home from school. I was feeling ill. And a woman helped me.





## 映画から選んだ、じっくりと味わいたいセリフのシーン

### 映画解説 & 注目すべきシーンの英語セリフ

本映画でぜひ耳を傾けたいシークエンスをとりあげよう。

セリフを英文で味わっていただきたい。

#### 注目シーン1

ハンナに本を読んであげるマイケル。どんな本だろう？学校の宿題に出された作者ホメーロスの「オデュッセイア」。ところが、この世界的に有名な叙事詩を知らないハンナは、「長い冒険の旅って？」と聞いている。その後、マイケルは復活祭の休みに2人で自転車旅行に出かけよう、と提案する。なにげない会話だが、幸せに満ちあふれる2人を想像できよう。

MICHAEL (face off): “The Odyssey” by Homer. It’s my homework.

MICHAEL (voice over): “The Odyssey” by Homer.

HANNA (off): **What’s an odyssey?** \*長い冒険の旅

MICHAEL: **It’s a journey. He sets out on a journey.** \*旅に出る

\*“The Odyssey”: 詩人ホメーロスの作とされる古代ギリシャの叙事詩で、「イーリアス」の続編。



## 注目シーン2

ハンナの失踪にマイケルは傷心して落ち込むが、大学に進学して法律を専攻することになった。法学ゼミのフィールドワークでは、当時ひんぱんに行われていたアウシュヴィッツ裁判の1つを傍聴するために、担当教授に引率されて隣町の裁判所へ行くことになる。法廷で見たのは、ハンナが判事から起訴状に書かれた動機について質問されているところであった。ハンナが一つ一つ認めるのを聞いてマイケルは愕然となる。傍らで、マイケルとハンナの関係を何も知らない教授がついマイケルに声をかけるほど蒼白になる。印象に焼きつくシーンである。

HANNA (off): I was working at Siemens when I heard the SS was recruiting.

*\*the Secret Service* ナチス親衛隊

シーメンスで働いていて、親衛隊で新人募集しているのを知りました。

JUDGE (off): Did you know the kind of work you'd be expected to do?

どんな仕事をすることになるか知っていましたか？

HANNA: They were looking for guards. I applied for a job.

看守を募集していましたので、応募しました。

JUDGE (off): And you worked first at Auschwitz?

最初はアウシュヴィッツでしたね。

HANNA (off): Yes. はい。

JUDGE (off): Until nineteen forty-four. 1944年まで。

*MICHAEL DROPS HIS HEAD.* マイケルが頭をうな垂れる。

JUDGE (off): Then you were moved to a smaller camp near Cracow?

その後にクラクフ近郊の小収容所へ移された？

HANNA (off): Yes. はい。

Prof. ROHL (overlapping):(quietly) Are you okay? 大丈夫か？

JUDGE (off): You then helped move the prisoners west in the winter of nineteen forty-four in the so-called death marches?

それから1944年の冬、西へ向かって囚人たちをいわば死の行進をさせて移動するのを手伝った？

*MICHAEL (overlapping):(quietly) Yeah, I'm fine.* ぼくは大丈夫です。

### 注目シーン3

帰路の列車の中で先ほどの裁判を傍聴したことについて、ロール教授が学生たちの感想を聞いている。アウシュヴィッツで働いていたということだけで犯罪者にすべきかどうか、合法か非合法か、など、議論しているシーンである。

The question is never “Was it wrong?” but “Was it legal?” And not by our laws. no, by the laws at the time.

Prof. ROHL: So what did you think?

ところで君たちはどう思う？

MICHAEL: I don't know. (pause) It wasn't quite what I expecting.

分かりません。何も予想していませんでしたのでさっぱり。

Prof. ROHL: Wasn't it? In what way? What were you expecting?

そうかな？どんなふうに？なにか感じたことは？

DIETER: I thought it was exciting.

ドキドキする事件だと思いました。

Prof. ROHL (off): Exciting? Why? Why did you think it exciting?

ドキドキするって？なぜ？ドキドキする事件だとなぜ思った？

DIETER: 'Cause it's justice.

正義があるからです。

Prof. ROHL (voice over):

Societies think they operate by something called morality, but they don't.

社会はモラルによって動いているが、そうでないことも。

They operate by something called law. You're not guilty of anything merely by working at Auschwitz.

法によって動くこともある。アウシュヴィッツで働いていたというだけでは罪にならない。

Eight thousand people worked at Auschwitz.

8000人もアウシュヴィッツで働いていた。

Precisely nineteen have been convicted, and only six for murder. To prove murder you have to prove intent.

詳細は19人が有罪判決で、6人だけが殺人罪だ。殺人罪を認めるにはその動機を立証しなければならない。

That's the law. The question is never “Was it wrong?” but “Was it legal?” And not by our laws. no, by the laws at the time.

それが法律だ。問題は「悪かったか」ではなく「合法だったか」だ。我々の法によるのではなく、いや、当時の法律によるのでもない。

DIETER: But isn't that narrow? それは狭くありませんか？

Prof. ROHL: What? なんだった？

Prof. ROHL : Oh, yes. The law is narrow. On the other hand suspect people



who kill other people tend to be aware that it's wrong.

まあ、そうだ。法律は狭いが、一方では、殺人者は悪いと気付いているはずだと  
嫌疑をかける。

#### 注目シーン4

起訴事実を確認するため、判事がハンナに事実を確認し、ハンナは凛々しく判事に応えて  
いる。だが、囚人が死ぬことを分かっているがなぜ送り出したのか、と核心を尋ねられたハ  
ンナは答えに窮して、不利になることも考えずに判事に向かって What would you have  
done? と質問する。ここは見逃せないシーンである。

**JUDGE (off):** And so far, each of your fellow defendants has specifically denied  
being part of that process.

これまでのところ、被告のみなさんはとくにこのことへの参加を否定しています。

**Now I'm going to ask you. (pause) Were you part of it?**

ところで尋ねますが、あなたは参加しましたか？

**HANNA:** Yes. はい。

**JUDGE: So you helped make the selection?** それであなたは選別する手伝いをしましたか？

**HANNA:** Yes. はい。

**JUDGE (off):** You admit that? それを認めますか？

**JUDGE:** Then tell me...how did that selection happen?

その選別をどのように行ったか話してくれませんか？

**HANNA (off):** There were six guards, so... we decided we'd choose ten people each.  
That's how we did it every month. We'd all choose ten.

看守は6人なので、私たちが決めてそれぞれ10人選び、毎月やっていました。みんなが10人選  
びました。

**JUDGE (off):** Are you saying your fellow defendants took part in the process?

あなたは仲間の被告たちもこれに参加していたというのですか？

**HANNA:** We all did. 全員でしました。

*CAMERA RACKS FOCUS ONTO THE DEFENDANTS AS THEY REACT, SHAKING THEIR HEADS.*

**JUDGE (off):** Even though they've denied it? Saying "we," "we all" is easier than  
saying "I," "I alone" isn't it, Miss Schmitz?

皆が否定していても？「私たち」とか「私たちみな」の方が「私」とか「私だけ」  
はしませんというより

言い易いからですか、シュミットさん？

**JUDGE:** Did you not realize that you were sending these women to their  
deaths?

あなたは女囚人たちを死なせることになるかと認識していなかったのですか？

HANNA: Yes, but there were new arrivals, new women were arriving all the time, so...the old ones had to make room for the new ones.

知っていましたが、が、新しい到着者がいましたので、新しい女囚人たちが次々に到着しますので、古い囚人は新しい囚人に場所を明け渡さなければなりませんでした。

JUDGE:(exhales) I'm not sure you understand.

言っていることがよく分かりませんが。

HANNA (off): But we couldn't keep everyone. There wasn't room.

わたしたちは全員を収容できませんでした。場所がなかったのです。

JUDGE (off) (overlapping): No. but what I'm saying. Let me rephrase.

いや、私が言っているのは。繰り返しますが、

To make room, you were picking women out and saying "You, you and you have to be sent back to be killed."

場所を作るために女囚人を選んで「あなたやあなたとあなたは送り返されて死ぬのよ」と言っていた。

HANNA: Well, what would you have done?

あなたならどうなさいましたか？

HANNA (off): Should I never have signed up at Siemens?

私はシーメンス工場で書類に署名しなければよかったのでしょうか？



## 映画情報

2009年6月19日(金)TOHOシネマズ スカラ座ほか全国ロードショー

配給: ショウゲート

© 2008 TWCGF Film Services II, LLC. All rights reserved.

監督: スティーブン・ダルドリー (『めぐりあう時間たち』『リトル・ダンサー』監督)

製作: アンソニー・ミンゲラ/シドニー・ポラック

原作: ベルンハルト・シュリンク 「The Reader」(独/英) 脚本: デヴィッド・ヘア

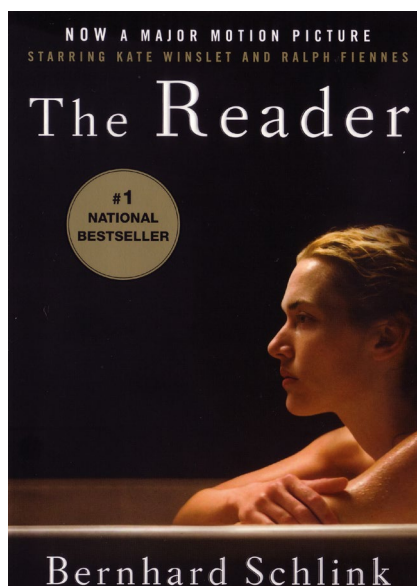
出演: ケイト・ウィンスレット(ハンナ・シュミッツ役)、レイフ・ファインズ(マイケル・バーグ役)、デヴィッド・クロス(青年時代のマイケル・バーグ役)ブルーノ・ガンツ(ロール教授役)、アレクサンドラ・マリア・ララ(子供時代のイラナ・メイザー役)

製作国: アメリカ/ドイツ 言語: 英語

●ケイト・ウィンスレットは本映画で米・アカデミー主演女優賞(オスカー像)を受賞

●原作者ベルンハルト・シュリンク (1944- ) フンボルト大学教授

1995年『朗読者』出版



## HANNA と MICHAEL の履歴、社会情勢

1922 10.21		ヘルマンスタットで HANNA 生れる
1940	第2次大戦勃発	
1942	太平洋戦争	HANNA はベルリンのジーメンスで働く
1943 秋		親衛隊に入る 21 歳
1944 初頭まで/ 45 年の冬		アウシュヴィッツ→クラクフ近郊の強制収容所で看守として働く 23 歳
1945.5	ドイツ降伏	HANNA 33 歳 敗戦後に西側へ移り、MICHAEL の故郷カッセルで 8 年間住む
1958		Neustadt, West Germany 当時、ギムナジウム 6 学年生 MICHAEL は 15 歳、HANNA 38 歳
1959	東ドイツベルリンの壁設置	HANNA 失踪
1963		HANNA (43 歳) と法廷で再会 MICHAEL (20 歳) は強制収容所裁判のゼミで法廷見学、 HANNA に無期懲役の判決が下る。服役
63・12 —65・8	西ドイツで「アウシュヴィッツ 裁判」行われる。	MICHAEL は修習生時代にゲルトルートと結婚。娘のユリアが 5 歳のとき離婚。法史学者として大学で研究職に就く ・第三帝国時代の法律を研究
1971		HANNA (51 歳) の服役 8 年後、MICHAEL は朗読テープを作成して、10 年間彼女に送り続ける
1982		HANNA (61 歳) 恩赦当日に自殺 MICHAEL は 38 歳
1989	ベルリンの壁崩壊 ドイツ連邦共和国	SCHMITZ 1923-1988
1995		回想 MICHAEL は 52 歳